



MONGOLIA

学校名：聖徳学園中学・高等学校

氏名：石田 恒平

[担当教科：芸術(美術)]

- 実践教科等：美術
- 時間数：5時間
- 対象生徒：高校1年生
- 対象人数：30人

1 単元名

持続可能な開発のためのポスターづくり

2 単元の目標 (ESD の能力・態度)

- ・異文化理解への興味・関心を高める。(異文化理解に対する能力)
- ・日本とモンゴルの関係性について学びポスター制作を行う。(つながりを尊重する態度)
- ・開発途上国が置かれている現状や問題点などを把握し、情報を収集・選択・判断し、自己の考えを発信することができる。(多面的、総合的に考え行動する能力)
- ・日本とモンゴルのよりよい関係作りに貢献するために、交流する中で話し合い一緒に何が出来るのかを考える。(他者と協力する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・一人一人が日本とモンゴルの文化や価値観、生活の違いに気づく(多様性)
- ・一人一人が地域や世界で、異なる文化をもつ人々や異なる状況にある人々の存在を認めて理解し、多様性を尊重できる。(相互性)
- ・一人一人が日本とモンゴルのつながりについて気づき、何に対して協力できるのかを考える。(連携性)
- ・一人一人が異文化理解への興味・関心を高め、自分たち一人ひとりが望ましい方向に変化させるために社会の一員として行動し、果たさなければいけない事を理解し、そして行動できる。一回で終わらせるのではなく継続できる事が大切(責任性)

4 単元の指導について

(1)教材観

- ・本校の教育目標である個性・創造性・国際性を高める教育。
- ・単にモンゴルに対する知識や情報を与えるのではなく、実際にモンゴルにポスターを送るという作業を通して、モンゴルへの貢献という実践の心を高めることを目的とした教育。
- ・芸術という教科を通し個性・創造性を高める教育。

(2)児童生徒観

- ・授業を行う前は、異文化に対して興味関心をもっている生徒が少なかったが、授業後は生徒の様子や発言などからも異文化理解に対する意識が高まった。
- ・コミュニケーションをとることが苦手な生徒たちである。国境を越えても、自分の考えや想いを絵や言葉にして伝えることを体感する中でこのような苦手意識を克服させたい。

(3)指導観

- ・日本だけではなく、他の国を知ることや世界に目を向け世界の現状について知ることの大切さを伝えることに留意して指導にあたる。
- ・国際社会の一員として世界にどのように貢献することができるのかを伝えることに留意して指導にあたる。
- ・現地の生徒とのやり取りを通して連携性を高め、関係性を構築することに留意して指導にあたる。

5 評価規準

観点	授業への関心・意欲・態度	思考・判断・表現	創造的な技能	異文化理解に関する知識・理解
評価規準	・グループの中で、自分の課題を決め、学習できたか。 ・自分の考えや想いを制作を通じて形にすることができたか。	・学習を通して、異文化理解について考えることができたか。	・自らの発想意図を形にする芸術的表現の工夫ができたか。	・異なる文化に興味をもって、理解し、深めることができたか。
評価方法	・宿題やその他の提出物 ・学習の様子 ・発言や取り組み	・どのような意図でデザインしたか。	・ポスター制作	・ハンドプリントによる知識や理解度

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	[モンゴルってどんな国 PART1] ○教師海外研修への参加動機 ○JICA の活動内容 ○モンゴルクイズ ○フォトランゲージ ○青年海外協力隊の活動について	・日本との相違点や類似点などを見つけさせ、これから行う課題に対しての意図を理解し、興味・関心をもたせる。 ・青年海外協力隊の活動の様子を知り、人のために何かをすることについて考えさせる。	・研修で体験してきた事や写真、プリント、資料などを生徒たちに提示し、モンゴルの概要を知る。 ・グループに分かれ、フォトランゲージやモンゴルクイズなどを行い意見交換を行う。 ・青年海外協力隊のインタビュー映像をスライドで見せ、青年海外協力隊の方の活動の様子を知る。 ・宿題としてモンゴルについて自分たちで調べさせる。
2	[モンゴルってどんな国 PART2] ○モンゴルのアートに触れてみよう	・モンゴルの伝統文化や芸術作品に触れ、国々の文化に興味をもたせる。 ・気づいたことや感じたこと、調べてきたことを班ごとに発表し、全体で共有する。	・モンゴルで見つけた絵画や作品などを生徒たちに提示する。また、実際に購入してきたものを生徒たちに提示する。 ・モンゴルと日本の伝統文化の違いや気づいた事や感じたことを話し合わせる。 ・次項以降行うポスター制作でどんなテーマにするのかを話し合う。 ・日本とモンゴルお互いに理解する事ができるポスター作り
3 4 5	[ポスターをつかってモンゴルに送ってみよう！] ○意見交換 ○発表 ○ポスター制作	・日本の共通点や相違点について話し合う。そこで生徒たちに発表させ、イメージを膨らませる。 ・ポスター制作を行う上でグループごとにテーマを決めさせる。	・ポスター制作を行う上でどんなテーマにするのかを再度話し合わせ、各班ごとに発表させる。 ・テーマが決まったら下描きをする。言葉やメッセージなどはモンゴル語で書く。 ・今までの学習を振り返り、各班ごとに発表する。
今後の予定	・モンゴルの人の感想を聞き、感想について話し合う。話し合った事についての感想をまたモンゴルへ送る。メッセージが通じた場合には良かった点や他にも活かすことができないか話し合う。また通じなかった場合には何が足りなかったかについて話し合う。(2月に実施予定)		・1月にポスターをモンゴルに送る。 ・フィードバックを行う。 ・他教科・他学年との連携。高校2年生の総合の授業で JICA の方にご来校いただき、開発途上国に対して何が出来るかを班で話し合い、プレゼンテーションを行う。

7 授業事例の紹介

小単元名【モンゴルってどんな国？相互理解のためにモンゴルのアートに触れてみよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月13日(水)第3限

(イ)実施会場 芸術室(美術室)

(ウ)本時の目標 多様な文化や価値観に気づき異文化を理解する。

(エ)指導のポイント

- ・生徒たちが興味・関心をもてるよう、モンゴルで見つけた絵画や作品や実際に購入してきたものを生徒たちに提示する。
- ・モンゴルと日本の伝統文化の違いや共通点、気づいたこと、感じたことを話し合う。
- ・ポスター制作を行う上で、普段の美術の制作のように個人の制作とは違い、お互いに質問や意見交換をし合うことで、学習を深める切掛けにつながる。
- ・単に自分たちが好きなものを描かせるのではなく、お互いに相互理解を深めることに気付かせる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	・題材についての説明	・前回までの内容を再確認する。	スライド	・前回の授業の確認 ・題材についての説明	意欲や態度
展開 15分	・モンゴルで見つけた絵画や作品などを生徒たちに提示する。	・モンゴルと日本の伝統文化の共通点や気づいた事、感じた事を話し合う。 ・ワークシート	机間巡視	・課題に取り組み始めてから再度、意識してもらいたいことや条件などの説明を加える。 ・単に自分たちが好きなものを描かせるのではなく、お互いに相互理解を深めることに気付かせる。	・作業への取り組み ・ワークシートやプリント記述内容 ・話し合いへの参加態度
展開 15分	・ポスターをモンゴルに送る意味や目的とは何か	・ポスター制作で相互理解をテーマに班ごとで話し合う。 ・ワークシート			
まとめ 10分	・文化の多様性について	・班ごとに発表し、全体で共有する。	発表	・自分の考えを述べ、他者の意見を聞き、深め合えるような場をつくる	各班の発表の様子

【授業実践の様子】



文化の多様性について説明



モンゴルの生活を学ぶ



ポスター制作で相互理解をテーマに班ごとで話し合う



モンゴルで購入した画集など



モンゴルで見つけた絵画や作品

(2) 授業の振り返り

良かった点

- ・私が思っている以上に生徒たちは外国についてとても興味・関心をもっており、異文化理解に対する意欲が高いことを知った。
- ・授業の中で、現地で購入してきた絵画や伝統作品や実際に撮ってきた写真や動画を教材として活かす事ができ、生徒の興味・関心につなげることができた。
- ・ポスター制作を行う過程で、意見や発表を行ったが、積極的に発言してくれたことで良い意見がたくさん出た。

改善点

- ・美術の授業は週に1時間と他教科に比べると非常に時間数が少ない。1週間空いてしまうと生徒が前回の授業で行った内容を思い出したり、作業にとりかかるまでに時間がかかってしまう。そのため、次週の授業で何をして、どこまでやるのかなどのきちんと指示を伝える事ができたら良かったと思った。また、伝えたい事や考えさせたいことをもう少し厳選できれば、ゆとりある授業になったと思う。今後はその点を改善し授業に活かしていきたい。

(3) 使用教材

【教材①】モンゴルで見つけた絵画や作品 《リサイクルアート》



A. パソコンのキーボードを使ったベルトのバックル



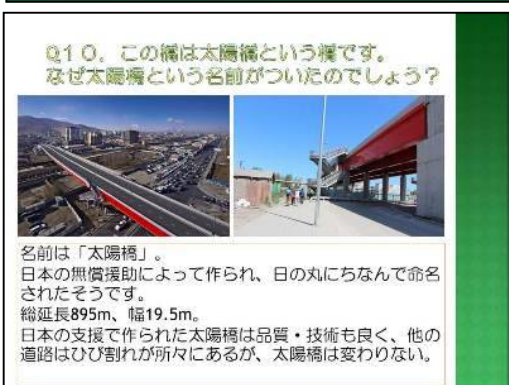
B. スプーンや金属から作られたバイクの模型



C. 馬だけで描かれた絵画

(A,B: 淡水資源センターに展示されていた作品) (C: Tuushin Hotel に飾られていた作品)

【教材②】パワーポイント抜粋資料



(4) 参考資料等

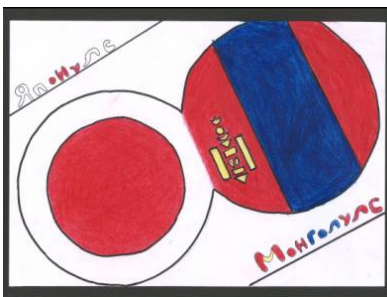
- ・「ESD QUEST イーエスディークエスト」 文部科学省
- ・「わたしたちの地球と未来 モンゴル国」 財団法人 愛知県国際交流協会
<<http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyouzai/PDF/H20/mongolia.pdf>>(2015 年 1 月 10 日)
- ・『地球の歩き方 モンゴル』 地球の歩き方編集室、ダイヤモンド・ビックス社、2013 年
- ・『現代モンゴルを知るための50章』小長谷有紀・前川愛編著、明石書店、2014 年

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

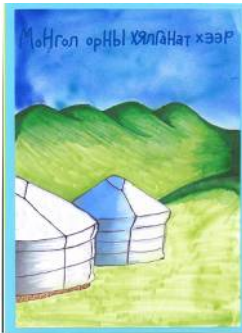
〈生徒たちの感想〉

- ・異文化を理解することは、自分の国についても理解することにつながるということに気付いた。
- ・実際に自分たちが描いたポスターを送るという事でしたが、モンゴルの学校の子たちがどんな反応をするのか、とても楽しみです。
- ・ポスターを送ることで、日本のことも色々知ってもらい、モンゴルの人達とも交流をもちたい。
- ・日本とモンゴルの絵や作品からも共通していることや違いを見つけることができた。

〈生徒たちの作成した作品〉



日本国とモンゴル国



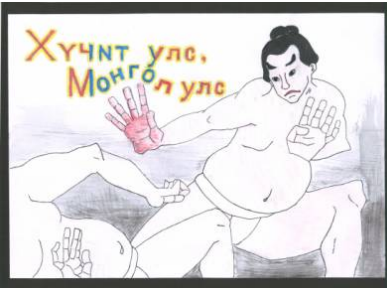
モンゴルの草原



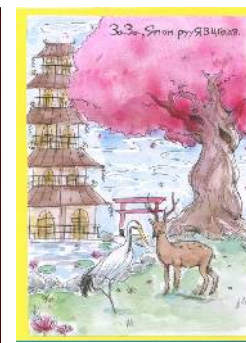
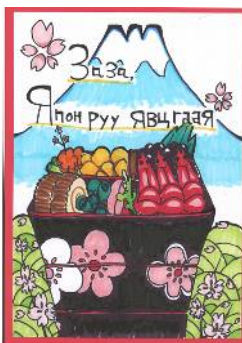
自然を愛す



日本とモンゴル



強い国 モンゴル



文化のつながりを深めよう!



さあ！日本へおいで

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

〈Plan〉モンゴルを素材として異文化への理解を深め、自分たちに何が出来ののかを考えさせる。

〈Do〉相手の国の理解や最初のモンゴルに対するイメージを授業実践を通じて気付かせ、ポスター制作を行う。

〈Check〉ポスターを描いている過程で、どのような表現が相手の国に対して受け入れられるのか、また、どんな表現が適切なのかを話し合いの様子から確認する。

〈Action〉完成したポスターをモンゴルへ送り、感想を聞いてそれを Plan へ反映させる。また、授業ではテーマが絞られすぎてしまい、同じようなテーマが多かったので、今後は異なる視点を大切にして取り組ませることを次回の〈Plan〉に加える。

成果

- ・今回の授業実践では、最終的にはモンゴルの学校にポスターを送ることが目的であったが、そこまで至る過程の中で生徒たちに相互理解や国際協力の大切さなど、たくさんの事を伝えることができた。また、授業の中で、生徒の反応や熱心に取り組んでいる様子を見る事ができ、教える事の楽しさを改めて感じた。
- ・今までは自分の描きたいもの、自分のための制作が多かったが、今回は相手のことを想ってポスターを描いた。また、一人ではなく、お互いに意見を出し合い、共同制作することによってより良い作品作りにつながった。普段の学校生活の中でも意見のぶつかり合いなどはあるが、みんなで協力することにより、より良いものを作り上げていくことの大切さを気づかせられた。
- ・普段の生徒との関わりの中で、教師海外研修での話題や海外に関する質問などを聞いてくる生徒が増えた。美術の授業を選択していない生徒からも、教師海外研修での話を聞かれることが増えた。また、生徒からの話も伝わり、保護者の方にも授業実践を示すことができ、非常に嬉しく思っている。
- ・今回はモンゴルの文化に興味をもち、モンゴルの人たちとコミュニケーションをとりたいという段階までたどり着いた。今後は最終的な目的である持続可能な開発につなげていきたい。

課題

- ・ポスター制作を行う上でテーマを班ごとに決めさせたが、結果として同じようなテーマが多くなってしまった。今後は違う視点からも意見交換ができるような取組みをさせていきたい。
- ・ポスターを送るということは実現できたが、次の段階として実際に送ったポスターがどう使われているのか、モンゴルの生徒たちの反応はどうだったかなど感想をやり取りしていきたい。また、可能であれば今度は逆にモンゴルから日本にポスターを送ってもらったり、ネットを使った交流も行っていきたい。翌年の高1に同じ活動を行い、持続可能な活動を行っていきたい。
- ・今回は美術の授業の中で行ったが、総合の授業や英語の授業など、今後は他教科や学年の先生方とも連携し、取組を持続発展させていきたい。

10 教師海外研修に参加して

今回の研修は、まさに「百聞は一見にしかず」だった。事前の国内研修で学習したことや考えたことが実際に見たり体験したりしたこととリンクして、学びが広がる瞬間がたくさんあり、改めて学ぶことの楽しさを知った。私が感じたことは、モンゴルと日本で言葉や文化は違ってもお互いに共通し、つながる場面が多々あったということだ。単に「この国のここが違う」「ここが同じ」だけではなく、その両方を知ること、理解することで、はじめて相互理解につながり、真の国際協力につながっていくのだと感じた。

本校では国際交流が盛んだが、今までは欧米中心に考えられがちであった。しかし、今年度はベトナム研修旅行も行われ、ハノイの JICA 事務所訪問も行った。また、来年度からはカリキュラムに中国語を導入するなど、学校全体としてアジア諸国に方向性を向けようと動いている。

生徒たちにも、単に外国へのあこがれだけでなく、国際社会の一員として世界にどのように貢献することが出来るかという意識をもって欲しいと思っている。今回、教師海外研修に参加して、自分の経験したことや学んだことをこれからも生徒たちに提供していきたい。

今回の研修に参加し、校種の異なる先生方やたくさんの方と出会うことができ、大変貴重な体験になった。この研修での体験は一生の思い出になることだろう。この経験をこれからの教員人生に活かしていきたい。